

「沖縄の木造建築物について」

内閣府沖縄総合事務局林務水産課 課長補佐 曲瀬川淳一

沖縄へ来まして半年以上が過ぎました。今回の寄稿にあたっては、この半年間における、私なりの沖縄の森林・林業・木材産業に対する「感想」について記したいと思いません。

学生時代にしっかりと勉強しておけば良かったのですが、沖縄に来て最初の問題として壁に当たったのは、沖縄の森林・林業・木材産業のスタイルがよく分からなかったことです。

まず最初に手持ちのデータをあさり、数多くの論文に目を通し、沖縄の皆さんとの意見交換を行いました。そのような中から多くのキーワードが登場します。掻い摘んで記しますが、蔡温先生の示された林業技術、100年以上前に来航した欧米人の旅行記の言葉、太平洋戦争で消失した木々、復興資材としての利用、県土の緑化、コンクリート住宅の普及、木炭・チップ材としての利用、首里城建設、ヤンバルクイナ等の貴重生物の発見、自然保護問題、近年の茸生産量の増加等、歴史と現状を実感させて頂きました。

ご存じの通り、森林・林業・木材産業は超長期のスパン（過去・現在・将来）の中でその存在・活用を考えなければなりません。沖縄における先人達も、生きる術の一つとして森林と木材を有効に利用するための林業技術を開発し、その発展は現代へと至ります。現代に生きる我々もこの超長期のスパンの一部を担っています。現状として技術もあり資源としての木材もありますが、例えば木材産業に対する戦後の歴史的要因（コンクリート住宅と移入材への依存）が大きく影響しているように、沖縄の森林・林業・木材産業にはいくつもの課題や制約というハードルが横たわっているようです。

一方で、今、世界自然遺産登録についての動きも見え始めてきています。

将来を考えた場合、今後の数年間において、沖縄の森林・林業・木材産業の方向性を整理していく場面が登場して来ることは間違いないと思います。簡単に表現しますが、今後どのような形で存在させていけるのか。人が生きていくための資源でもある木材の超長期性の中において、短時間ではありますが濃密な数年間が訪れようとしています。

最後になりますが、このような大きな問題を目の前にして、課題を一つ一つ確認しながら勉強不足を補い、また、このような時に、この地に職責を頂きましたことを幸いとして、少しでも問題解決のお役に立てればと考えています。